

大阪港

大阪港湾局

〒559-0034 大阪市住之江区南港北2-1-10

ATCビルITM棟10階

☎06-6615-7704

URL : <https://www.city.osaka.lg.jp/port/>



1. 概況

昔の航路標識である「みおつくし」が市章になっているように、大阪は港とともに繁栄してきました。大阪港は古代には難波津と呼ばれ、朝鮮、中国など大陸との交通の要衝でした。中世は淀川による京都への輸送の要路として栄えましたが、戦国時代には戦乱によって一時さびれてしまいました。今日の大阪は豊臣秀吉の大坂城築造と都市経営に始まっており、市内を縦横に走る河川や運河の多くは、豊臣、徳川両時代に開削されました。その優れた水運の便により、大阪は諸国物産の集散地として栄え、「天下の貨 七分は浪華にあり、浪華の貨 七分は船中にあり（広瀬旭莊「九桂草堂隨筆」）」と記されるまでにその商圏は全国に及びました。

大阪港は慶応4年7月15日に開港しましたが、当時は安治川に沿った河川交通を主とする河川港で、外国海運に対応することが困難でした。そこで築港義社、築港研究会などの団体が結成され、市民による熱心な築港運動が展開されました。この市民の熱意が結実し、明治30年に当時の市予算の約16倍に匹敵する総工費2,249万円の巨費をもって、大阪市が本格的な築港工事に着手することになりました。

築港工事は、明治36年8月に栈橋等の施設が概ね出来上がり、一般の利用が始まりました。その後、第1次世界大戦による経済界の好況と大阪の産業貿易の発展に伴い、大阪港の利用は急増しました。港勢の躍進は目覚ましく、わが国屈指の貿易港として、最盛期の昭和12年には入港船舶22万隻、4,381万総トンに上り、14年には、取扱貨物量は3,126万トンを数え、いずれも全国第1位を記録しました。殊に背後地の生産力を反映して原料輸入、製品輸出は、トン量では入超、価格では出超を示し、外国貿易ではアジア貿易の中心地となりました。

その後、第2次世界大戦と相次ぐ台風、地盤沈下などにより、大阪港は壊滅的な被害を受け、港湾機能は著しく低下し、再起が危ぶまれましたが、大阪市と市民が一体となって行った画期的な修築工事が順調に進捗し、大阪経済の復興を背景に、港勢は年々上昇を続けました。以降、コンテナリゼーションの進展やフェリー輸送の増加といった物流ニーズの変化に対応しつつ、プラザ合意や阪神淡路大震災、世界同時不況といった社会・経済情勢の影響を受けながら、平成30年の港勢は、入港船舶23,102隻、1億1,296万総トン、取扱貨物8,428万トンに及んでいます。

今日、大阪港は、高度な港湾施設の集積とポート・サービスの充実をもって、わが国でも有数の国際貿易港となっており、大阪港と神戸港が「阪神港」として、「京浜港」とともに「国際コンテナ戦略港湾」に選定されています。咲洲においてはコンテナ埠頭やフェリー埠頭を供用しており、夢洲においては国際物流拠点として、高規格コンテナ埠頭の機能強化や新たな国際観光拠点の形成にも資するインフラ整備（鉄道、道路、橋梁等）を行っています。また、天保山地区では、クルーズ客船の大型化による世界水準の客船ターミナルの整備を進めるとともに、にぎわい創出と環境魅力の向上をめざした集客交流拠点づくりに取り組んでいます。

引き続き、大阪港では、コンテナ貨物を中心とした取扱貨物量の増加や船舶の大型化、物流の効率化、多様化に対応していくことはもとより、市民の生命や財産を守るための防災機能を含め、臨海部に求められる機能や役割を的確に捉えながら、みなとづくりを進め、さらなる地域の活性化に貢献していきます。

なお、大阪市と大阪府では、広域的な視点による港湾管理の一元化をめざし、2020年（令和2年）10月1日に、双方の港湾局を統合し、「大阪港湾局」を設立しました。大阪港湾局では、大阪港と府営港湾の強みを生かし、弱みを補完のうえ、広域で機能分担や最適配置を図り、“ヒト・モノ・コトがより一層交流する拠点”として発展させ、安全・安心で良好な港湾環境のもと、背後圏にまで賑わいを図り、大阪・関西の経済・産業の発展の一翼を担うことをめざしています。